

# 個人的関心から

長野 秀樹

『原爆文学という問題領域』(川口隆行著、創言社 二〇〇八年四月)を視座としながら、原爆文学研究への展望について述べるといのが、今回、私に与えられた役割だった。著作そのものを批評するのではなく、あくまでも視座としつつ、研究への展望を述べなければならないのだが、どうしても私個人の興味関心から逃れることはできず、結果として、私と著者である川口さんの興味関心のずれと重なりを確認することから出発せざるを得なくなつた。

私が報告の中で取り上げたのは、「序」、「第一章 原爆文学という問題領域——「夏の花」「黒い雨」の正典化、あるいは『原爆文学史』」、「第三章 メディアとしての漫画、甦る被爆都市の記憶——『夕風の街 桜の国』」、「第四章 被害と加害のディスコース——戦後日本と「わたしたち」の諸章である。こうしたある意味で恣意的とも言える取り上げ方には、川口さんには不満が残るであろうが、お許し願いたいと思う。

さて、これらの章の内容と私の関心は、「体験は他者に伝わるか」「日常と非日常」「加害と被害」といった点において、重なっている。「日常と非日常」という視点は、小説における「夏の花」と「黒い雨」との比較、また、漫画作品では「はだしのゲン」と

「夕風の街 桜の国」との比較において用いられた「物差し」の一つであり、それぞれに後者が、原爆という「非日常」の出来事を、戦後の「日常」の中に取り込むことに成功したとして、評価された一因である。

「日常」という概念は、二五頁に引用された江藤淳の言葉では「平常心」という言葉で置き換えられ、さらに引用された江藤の言葉では「原爆をどんなイデオロギーにも曇らされぬ眼で、これほど直視し切った小説を私ははじめて読んだ」というように、「平常心」「日常」という概念が、イデオロギーから解放された視点の獲得であるとされ、川口さんは、「夏の花」は、「悲惨さ」の伝達という明確なメッセージ性が原水禁運動の政治性と親しいものとして忌避されていた(26頁)と述べる。その結果、「黒い雨」は、いわゆる「国民文学」として原爆文学を代表する作品となると同時に、「唯一の被爆国」の「国民」としての意識を形成していく上で、大きな役割を果たしたと川口さんは指摘している。おそらくは川口さんの関心のひとつが、こうして形成されていた、「被害者」としての国民合意の形成にいかがわしさを撃つことにあるのは、間違いがない。序章で石原吉郎を引用しながら、「いまなお、原爆について何ごとかを語ることは、「まやかしの連帯」をつくりあげることに加担してはいないのか」(6頁)という、自己反省はそのことの証左であろう。

「唯一の被爆国」という表現を梶子に、「被害者」でも無いのに「被害者」面をして、得々として原爆について語る姿。そうしたものにへ墮することを、峻拒しようとする姿勢である。それは、川口さんの研究者としての誠実さの表れでもある。

この姿勢は、第四章で中心的に述べられる「被害／加害」の問題を考える上での重要な視点ともなっている。冒頭で述べられる台湾人同僚の「平和記念式典の中継や原爆報道を見るたびに、被害者意識が前面に出ていて、吐き気がするほど気分が悪かった(160頁)」という、日本留学時の感想は、極端な形ではあってもアジアから、「唯一の被爆国」に向けられた視線であると言えよう。

単純に被爆国としての被害者性を言うだけでは、世界から、特に日本の侵略行為の被害者となったアジアからは理解を得られない、という認識は、ある程度の合意を形成しているのではないかと思う。ただし、それが国民的合意と言えるのかというと、かなり問題である。

日本が第二次世界大戦においてアジア諸国を侵略したという認識は、「自虐史観」、あるいは「東京裁判史観」などと言われ、攻撃を受けているが、大局的に見る限りにおいて、国民の多くの認識と一致するのだと思う。その点において、私は日本人の歴史認識を信頼している(航空自衛隊の田母神問題などがあつたとしても)。だが、原爆における「被害者性」と、第二次世界大戦におけるアジアに対する「加害者性」をどう、接続するのは容易ではない。一方において、長崎の原爆資料館から日本の加害責任を問う資料が撤去され(写真の信憑性に疑問が残るといふ理由であったにせよ)、一方で十年ほど前に訪れた、北京蘆溝橋近くの抗日戦争記念館の展示には、原爆のきのこ雲が勝利を告げる狼煙であるかのように展示されていた記憶がある。

第四章で述べられるのは、こうした溝を埋めるための試論であると、私は理解した。

まず、加害の認識の必要性を強調する本島等元長崎市長の言葉が引用されている。

「ちちをかえせ ははをかえせ 何故こんな目に遇わねばならぬのか」

峠三吉よこのことばは、親を皆殺しにされた、中国華北の孤児たちのことばだったのではないか。広島に原爆を落とされたのは「三光作戦」の生き残りだったのではないか。

こうした考えに対し、川口さんは次のように述べている。

繰り返すようだが、私は自己批判やそれによる自己中心主義⇨ナショナリズムの相対化を無用というのではない。全く逆であつて、むしろそれらを必須の課題とするものだが、本島発言に見られるようなアメリカの加害責任を抑圧、不問にするような形式化した加害者意識と罪悪感に自縛されることは、極めて質のよくない自己肯定⇨被害者意識を機軸とするゴーマンな物語を徹底批判できないばかりか、批判の対象とする敵をますます肥大らせる補充物にしかなるまい。

ここにも、重要な指摘がある。加害者であるということと前提とした上で、原爆の非人道性を訴えることが、はじめて可能になる。「加害者性」と「被害者性」を並行的に語り続けること。だが、それは大変困難な課題である。なぜなら、並行的にと私は安易に言ったが、言葉が線条性を持つ以上、同時に二つのことを語ることは出来ない。常に先に語ることと、後に語ることが存在する。本島氏は先に「加害」を語り、と主張している。

原爆について語られる時、常に先に語られてきたのは「被害」である。実際、原爆についてのみ語ろうとする時、まず語られる

ものが「加害」ではなく、「被害」であることも当然である。しかし、原爆より先に「三光作戦」があったというのも、単純な時系列の事実である。

ことは単純ではない。問題はポイントの打ち方であつて、二者択一的な選択ではないのだろう。だが、このポイントの打ち方に国民的な合意はまだない。そもそも、そうした合意が必要かということも、疑問ではあるが、強いて私がいま考えていることを述べれば、戦争について語る時、自国民の悲劇についてのみ語ることは許されない、ということである。知覧の特攻記念館へ持つ違和感と沖縄の平和の礎へ持つ共感、私の中でその点に起因している。

第三章「メディアとしての漫画、甦る被爆都市の記憶」については、川口さんの見解と私の考えでは、メディアの特性について若干の違いが見られた。

「日常」と「非日常」という、視点を導入すれば、小説作品における「夏の花」と「黒い雨」との関係は漫画作品における「はだしのゲン」と「夕風の街 桜の国」の関係に置き換えることができるだろう。それぞれに前者が、非日常として原爆を描き、原爆の残酷性を強調するのに対し、後者は日常のなかに領略することによって、原爆を作品化することに成功している。そうした点では、両者の関係は相似形を描くのだが、一方で「国民文学」としての資格を「黒い雨」が獲得しているのに対し、学校教育のなかでも様々な形で取り上げられ、「国民的漫画」とでも言えるような地位を獲得しているのは「はだしのゲン」である。私の勤務する長崎の私立大学では「黒い雨」を知らない学生はいても、「は

だしのゲン」を知らない大学生はほとんどいない。

そうした差が生まれているのは、「日常」「非日常」といった物差しが、決定的な意味を持たないということと同時に、小説と漫画という媒体の特性の差であるということも考えられる。言語による小説と基本的には絵画を中心にする漫画では、読者の理解の方法も異なるはずである。漫画は視覚に直接訴えることによって、再現力やイメージを喚起する力を強く持つと同時に、物事をステロタイプ化する危険性を多分に持つ。「はだしのゲン」は、そうした特性を、意識的か無意識的か、分らないが、充分に利用することで成立している。被爆直後の被爆者の姿を描く時に、両手から皮膚を垂れさせながら、幽鬼のように歩く姿として描くのは、その典型であり、現在、被爆直後の被爆者の姿として、国民の多くにイメージされるのは、その姿であろう。

それに対し、「夕風の街 桜の国」では、そうした漫画の特性を意識的に全体として抑制し、特定の場面にのみ、特化して強調しているように見受けられる。そうした点が、漫画としての特性を弱め、「文学」に寄り近いスタンスを与えているのではないだろうか。原爆文学研究会の当日にも、漫画という媒体をどのよう

に評価すべきかが議論になつたが、具体的な表現特性を議論しながら詰めていく必要があるように感じられた。

もう一点、「夕風の街 桜の国」について言えば、川口さんが言うように、この作品が広島

た人名の持つ意味を、作者の意図を超えて、評価すべきだと考えている。

#### 後記

川口隆行氏の敬称は、研究会の席上と同じく「さん」とさせて頂いた。引用本文の出典は『原爆文学という問題領域』<sup>プロブレマティク</sup>を参照されたい。